

# 子どもの育成と自立を導き 保育の質を向上させる 小集団活動

社会福祉法人 至誠学舎立川 至誠第二保育園

園長・高橋 紘さん

庶務・館野 八重子さん、保育士・稲垣 千鶴さん

取材・文 山口幸正



園長・高橋紘さん

日本の社会福祉は恵まれない人たちに手を差し伸べる篤志家の活動から始まっている。1912年に東京神田で少年保護事業を始めた稲永久一郎翁もその一人だった。翁が私財を投じて設立した財団法人至誠学舎は戦後、社会福祉法人となり、現在は児童養護施設、特別養護老人ホーム、保育園などの事業を展開している。戦後の制度改革で少年保護事業が国の事業となり、児童養護施設へと転換した。子どもを預けて働きに出たいという母親は当時も少なくなく、そんな母親たちのための保育園を立川市につくったのである。働きたくても仕事がない母親には内職仕事のあっせんもした。1949年のことである。その後、制度改革や地域社会の動き、利用者のニーズの変化により何度となく事業内容の変革を迫られてきたが、柔軟に対応できる体質が小集団活動により育っているようだ。

## なぜ保育園でQCサークルか？

至誠保育園は立川、日野、国立の子どもたちを預かっていたが、10年後には日野市に至誠第二保育園が開設された。さらに最近になって同じ日野市内に、2001年に万願寺保育園が、今年2006年からはしせい太陽の子保育園が至誠第二保育園から分かれて開園している。

至誠第二保育園の園長で稲永久一郎翁の孫に当たる高橋紘さんは、子どもたちを預かって育てることで働くお母さんたちを応援し、さらに保育園を通じて地域の人々の役に立とうという使命感に燃えた人である。だが、園長である自分ひとりが頑張ってもたかが知れている。3園の職員40人の一人ひとりが園の使命を理解し共感し、自分からその役割を担おうとしてくれない限り保育園の評判と影響力は広がっていかない。そこで高橋さんが注目したのがQCサークル活動だった。

日本福祉施設士会という団体がある。老人施設、障害者施設、保育所など社会福祉施設の長で福祉施設士の資格を持った人の団体で、高橋さんは現在この団体の副会長を務めている。この団体が会員施設の体質強化のためにQCサー

クル活動の導入を推奨したのがきっかけで、至誠第二保育園はその指導を受け1992年から活動を始めた。

子どもを預ける側の親たちから見れば子どもになにかあったら気が気ではない。クレーム対応などでは、ともしれば一般の企業以上のスピードや対応力が求められる。職員たちのそういった対応力、判断力を育てるというのも一つのねらいでもあると高橋園長は語る。

保育園のクラスは0～2歳児は年齢別、3～5歳児は縦割りで編成されている。最初は各クラスの3人の担当職員の中から1人ずつをピックアップして1サークルを編成していたが、5年くらいたってから職員全員が参加するようになった。最近はクラスごとにサークル編成し、クラスの担当職員を中心に事務職などクラス担当を持たない職員もどこかのクラスに入る形で、1サークル5～6人で活動を行っている。

毎年4月に新しいクラスがスタートする。そこから活動が始まり、3～4ヵ月をかけて活動を行い、7月後半にテーマ発表会を開催。発表を聞いた高橋園長から問題点や足りない部分を指摘されたサークルは、もうひと工夫を重ねて8月に再度発表する。現在は2つの園を加えた3園から各1サークルの優秀サークルが選ばれ



館野八重子さん



稲垣千鶴さん

11月に日本福祉施設士会が開催する全国大会に出場している。発表会が終わると、サークル活動は休止期間に入り、後は自由に個別に改善活動を行う。

## 子どもたちの育成と自立を促す

保育園が担っている大きな役割は、子どもたちの成長段階に応じて、集団生活に適応させ、しつけし、さまざまな体験を通して自立へと導くことである。保育士たちはもちろんその方法を学んできて保育士となっているのだが、QCサークル活動は日々の保育活動の中でそれらをどう実践していったらよいかを話し合い、知恵を出し合い、最も効果的な方法を探るために活用されている。

過去のテーマをしてみると、「指しゃぶりをやめるには」「お箸を上手に使うには」「スプーン・フォークの持ち方」「しっかりおててを洗おう」「ぶくぶくうがができるかな」「逆上がりができるようになるには」「竹馬に上手に乗るには」「あいさつができるようになろう」……などがある。「保育園周辺の環境を知ろう」というテーマもあった。保育園ではクラスごとによく園外の公園まで出掛ける。そこでは気分が開放的になり、さまざまな自然や遊具と出会うことができる。

保育士たちがそういう公園をたくさん知っていれば、子どもたちをもっと楽しませることができる。そこで、稲垣千鶴さんら0歳児のクラスがこのテーマに取り組んだ。子どもたちを連れていろんな公園に出掛け、そこにどんな遊具



散歩マップ(夏バージョン)

があるか、季節ごとにどんな花が咲いているか、どんな昆虫を見つけることができるかなどを調べた。いろんな人にも聞き、図書館で調べた情報も加えて、それらを集約してマップをつくり、他のクラスやお母さんたちにも配った。

## 地域との交流を深める

至誠第二保育園の活動で特徴的なのは地域との交流活動だ。園の垣根を越えたもっと広い社会の中で子どもたちを育てようというねらいとともに、保育園は地域の人たちに役に立つべきであり、都会化と核家族化の進展でほころびの目立つ地域コミュニティづくりに保育園が一定の役割を果たしたいというポリシーがある。

高橋さんがまだ子どもの頃、少年保護事業の時代に稲永久一郎翁は月に1回地域の人たちを集めて一緒に鍋を囲んで語り合う催しを開いていたという。1949年に保育園が始まってからは久一郎翁の娘である高橋園長の母が、新しいフォークダンスを習ってきては、地域の青年団の人たちと夜遅くまでフォークダンスを踊った。保育園は地域とともにあり、地域に奉仕することこそ自分たちの使命という思いが高橋さんのDNAの中に刷り込まれている。

今は日曜ごとに親子サッカー大会を開催し、春と秋にはファミリーキャンプを開催してい



地域のお年寄りとの交流活動

る。子どもたちだけでなく親たちにも参加を促すためである。親同士の交流を図れば、1人で子育てに悩まなくてもすむ。子どもが介在した親同士のネットワークが広がれば、地域・社会全体で次の世代を育成していこうという風土をつくることにつながると高橋さんは考えるのだ。

いくつかのQCサークルがそうした高橋園長の考え方に共感して地域との交流をテーマにした活動を展開している。

数年前のテーマだが「子どもと地域住民のスローフード」というのがあった。スローフードはファストフードの反対語で、もっとゆっくり時間をかけて食べることを楽しもうという意味である。そのスローフードをテーマにしたイベントをQCサークルが企画した。地域の高齢者のグループを保育園に招き、そのうちの1人から手打ちうどんの作り方を教わった。高齢者と園児たちが一緒になってみんなで粉を練るところから始め、できたうどんをみんなで食べた。

その時うどんの打ち方を指導してくれた人はいまはもう亡くなっているが、その技術を職員が伝承し、毎年卒園生を集めた同窓会やバザーでその腕前を披露しているという。

館野八重子さんが参加した今年の2歳児のクラスは「2歳児の地域交流」というテーマで活動している。園では毎週月・水・金の8:30～13:30に体験保育を実施している。子育てに悩みを持つお母さんと子どもに保育園に来てもらい、保育園の生活を体験してもらおうというのがもとの趣旨だが、至誠第二保育園ではそれをもっと広げて、入園希望の有無に関係なく同じ年代の子どもと遊ばせたいと思っているお母さんと子どもに、どうぞ気軽に保育園にきてくださいと呼びかけている。体験保育に登録している親子は約200組。体験保育の日にはそんな親子が17～18組集まってくる。

だが、問題は体験保育にやってくる子どもたちがなかなか遊びの仲間に加われないことだ。

そこで行われている遊びになれないためか、園児たちの活発なパワーに気後れするのか、輪の中に入れて母親の手をにぎったままじっと園児たちの遊びを見つめている。

サークルはその状態をどうしたら改善できるかというテーマを取り上げた。みんなで話し合い検討した結果、サークルが実施した対策は次の通りである。

①まず、体験保育に参加登録している父兄に、体験保育が体験保育の子どもたちと園児との交流を図り、育ち合いをめざしていること、1人で子育てに悩まず、悩みを分かち合う場にしたかと思っていることを手紙で伝えた。

②次いで「お宅のお子さんは園児たちと遊んでいますか」「お子さんと園児たちのかかわりをどう変えていきたいですか」などとアンケートし、お母さんたちがもっと子どもを集団の輪の中に入れていたいと思っていることを確認した。

③園児たちに体験保育のお母さんや子どもたちにあいさつするよう促し、みんなであいさつの歌を歌うことにした。

④体験保育の子どもたちには職員が遊びの輪の中に入るよう誘いかけ、また、すぐに参加しやすいエプロンシアター紙芝居などを活用することにした。

⑤体験保育の時間帯だけでなく、園外の公園などで園児を遊ばせるときも同じ園内で遊ぶ同世代の子どもたちに輪の中に入るように声をかけることにした。

職員たちのこうした働きかけで、体験保育の子どもたちと園児の垣根が低くなって一緒に遊ぶようになり、お母さんたちも職員と親しくなり、子育ての相談を持ちかける人が増えた。

## さらなるレベルアップに向けて

このほか、「必要なものがすぐに取り出せるシステムづくり」「日誌を効率よく打つには」「保護

者向け掲示板を分かりやすく表示する工夫」など仕事の効率アップをめざすテーマが続いている。その中に「行事をシェイプアップさせよう」というのがあった。お誕生会や運動会、音楽会などのイベントで、ともすれば計画がどんどん膨らんでいき、そのために過大な練習が必要になる。どうしたらもっとシェイプアップできるかというのが最初の問題意識だったが、このテーマにはもうひとつの側面が指摘された。

行事のための準備ととらえると園児たちも負担を感じてしまうが、毎日の日課として少しずつ積み上げた成果をイベントで発表するのだと考えればもっと楽しんでやれるのではないか。

そんな意見が出てきて、もっと議論を深めるために次の期にも同じテーマを継続することになっている。

これまでのQCサークル活動は、職員たちが感じた問題点を、全員参加でみんなの意見を集めて解決を図ってきた。次々リーダーを交代しながら新しいテーマに挑戦してきたことで、職員全体の問題解決力を高め、保育の質を向上させ、さらに地域との交流を深める上で一定の役割を果たしてきた。5年前に万願寺保育園を、今年4月にしせい太陽の子保育園を無理なく立ち上げることができたのは、QCサークル活動を通じて自ら行動し問題を解決できる職員が育っていたからである。ただ、活動のすすめ方は民間先進企業の活動を見よう見まねでぞってきただけでまだ甘さがある、と高橋さんは言う。

そこで、今年度から稲垣さんと館野さんがリーダーとなり各クラス1名の代表者による選抜サークルを編成し、1年を通じてひとつのテーマに挑戦しながら、外部コンサルタントの指導をあおいで、抜け落ちのない的確な問題解決手法を学ぶことにしている。そのノウハウは順次各クラスのサークルに下ろしていく予定で、この計画を終えると至誠第二保育園の活動はもう一段レベルアップすることになる。